

資 料

明治から昭和前期の佐久地域における医療史

—開業医 荻原源吉の生涯—

Medical History in Saku Area through Meiji to Early Showa Era
—the Life of Medical Practitioner Genkichi Ogihara—

箕輪 千佳

Chika Minowa

キーワード：医療史，明治・大正時代，昭和時代前期，開業医，佐久

Key words : medical history, Meiji Taisho era, early Showa era, medical practitioner, Saku

要旨

明治時代初めまで自由開業制だった医師制度に、政府は西洋医学に基づく医学教育と免許制度を導入し、医師の数と質の確保のため、明治から大正にかけて医師養成制度を大きく変化させた。荻原源吉は日露戦争で看護卒として従軍したことから医師を志し、小学校の教職に就きながら、東京で開催された夏季講習に通い医師検定試験に合格した。医師となり無医村だった三宅島で開業、郷里の佐久に戻っても無医村に出張診療を行い、貧しい人にも差別なく診療を行った。その時代、貧困者への医療支援は、皇室および政府や地方行政の経済的補助を受け、医師会や産婆会等様々な団体の医療支援として展開される一方、医療職者それぞれの博愛の精神に支えられたものであった。

I. はじめに

江戸時代に漢方医、蘭方医は世襲であり、自由開業制であったが、明治政府は明治7年「医制」を公布し、西洋医学に基づく医学教育と資格制度を導入した。それまで開業していた漢方医と蘭方医の医業も認める一方、医師の数と質を確保するために、同16年からは事実上独学で受験可能であった医術開業試験を実施、帝国大学や医学専門学校の医学教育機関を卒業した者には無試験で医師資格を与

えるなど、次々と医師の身分に関する法令が公布された。

明治から昭和初期の佐久地域の医療については、佐久市志、北佐久小諸医師会誌、佐久医師会誌等に詳細な記述があるが、内容は衛生行政や社会状況の記述と医師会活動報告等である。今回、大正9年から昭和27年まで、現在の佐久市中込で医院を開業していた荻原源吉が医師資格を得るまでの資料を得、彼の子息である長男信氏、二男秀男氏、五女箕輪啓子氏、親戚で幼少期に同居していた並木良

受付日 2014 年 10 月 13 日 受理日 2015 年 1 月 26 日
佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing



図1 萩原源吉(37才頃)

子氏の回想から、他にはない当時の開業医の様子を知ることができた。これらは佐久地域の医療の歴史の貴重な資料であると考え、社会状況及び医師資格制度の変遷と照合し整理して報告する。

Ⅱ. 医師を志すまで

萩原家の始祖は甲斐の出身で、武田信玄の信濃攻略と同時に岩村田に来て、信玄が深く帰依していた龍雲寺の執事職として留め置かれたことに始まる。源吉は明治15年4月7日、北佐久郡(現在の佐久市)岩村田で庄治・たねの長男として生まれた。明治維新後、地方では藩校は中学へ移行するケースが多く漢学を中心に教育していたが、東京では旧藩主の多くが洋学を加えた学校を開業していた。その他、英語・数学・簿記などの各種学校があり、地方から東京に出ていく若者が多かった。私立中学校の一つである成城学校入学者の出身地を示す資料が残っているが、東京と九州が約

2割で、東北から四国・中国までまんべんなく入学しており、学生は全国から集まった(武石, 2005)。佐久地方に中学校ができたのは明治34年であり、それまでは30キロ以上離れた上田まで行かなくてはならなかった。そのような事情もあり、源吉は東京の中学校に進学、入学した東京中学校は前身を上野塾と言い、明治5年に数学者の上野清が創設した私立中学校であった(東京高等学校 学校の歩み <http://www.tokyo-hs.ac.jp/ayumi.html>)。

旧制中学校は12歳から17歳の5年制であったので、源吉は17歳で卒業すると郷里に戻り教職に就いた。信氏は父である源吉から、岩村田、平賀、中込、野沢(いずれも佐久市)の各小学校で教員をしたと聞いている。長野県佐久市立岩村田小学校百周年記念事業実行委員会(1978)の教員名簿には、明治34年1月から岩村田小学校で、佐久市立野沢小学校創立九十周年沿革誌編集委員会(1965)の教員名簿には同40年から43年まで野沢小学校で勤務していたと記録に残っている。こうして、小学校の教員をしていた明治37年(22歳)、日露戦争が勃発した。徴兵令は国民皆兵が原則であったが、体格が基準に達しないものや病気の者、戸主と跡継ぎ等は兵役を免除されており、源吉は長男であったので免除となっていた。しかし、自ら看護卒に志願し、明治37・38年の従軍で、感謝状と従軍記章を与えられている。

当時、陸軍病院では看護婦や看病人と呼ばれる女性が看護に当たっていた。その一方、戦地や野戦病院では看護卒と呼ばれる衛生兵が当たっており、男性志願者から徴集されていた。看護卒の育成はどのようにして行われたか資料は少ないが、鈴木(2010)によれば、明治16・17年の看護卒の取扱手続きでは、6か月の教習が課せられている。教習は3つの教科からなり、第1教科は柔軟体操と歩兵教練という陸軍兵士としての基本知識と技術、第2の教科は「人体造構ノ概略」と主として包

帯法、第3教科は「看護法」「伝染病者の看護法」「救急法」「患者運搬法」「調剤法大意」となっており、戦場での負傷兵への処置と野戦病院での衛生管理と医師の補助的処置を内容としていた。国会図書館の近代デジタルライブラリーでは「陸軍看護卒教科書第4版」（陸軍省著、出版年不明）が公開されている。源吉が学んだ頃の教科書の資料はないが、明治23年発行の「陸軍看護学就業兵教科書」（小林, 1890）の目次を見てみると「看護法」として病床を含む環境調整、身体の清潔法、飲食、睡眠、排泄、に關することや、体温測定法、「治療介補」として与薬法、罨法、救急法、手術準備、止血法等、包帯法、「衛生の大意」として営地の衛生管理、「調剤法大意」と、多岐にわたり専門的な内容であったことが解る。これらを6か月間で修了すると卒業証書が授与され、検査後に二等看病卒に命じられた（鈴木, 2013）。源吉は明治38年6月、23歳の

とき、補充兵陸軍砲兵2等卒として、陸軍看護学卒業という卒業証書を得ている（図2）。

Ⅲ. 医師になるまで

源吉が医師を志した動機は明らかではないが、明治39年5月に陸軍から除隊した後、同年7月30日～8月5日に東京医学校で夏期講習を受けていることから、看護卒として受けた教育と従軍の経験が深く関係しているのではないかと思う。明治25年頃は陸軍看護長から准士官に進級すると、医師免許が与えられたため、上級学校に進学できない優秀な若者は看護卒を志願するケースが多かったという（渡辺錠太郎, 2004）。従って、医師を志して看護卒を志願したことも否定できない。

明治13年、長野県内では現在の長野市に県立医学校が設立されたが、同17年に初めて卒業生を出した後、翌年には廃止となった。

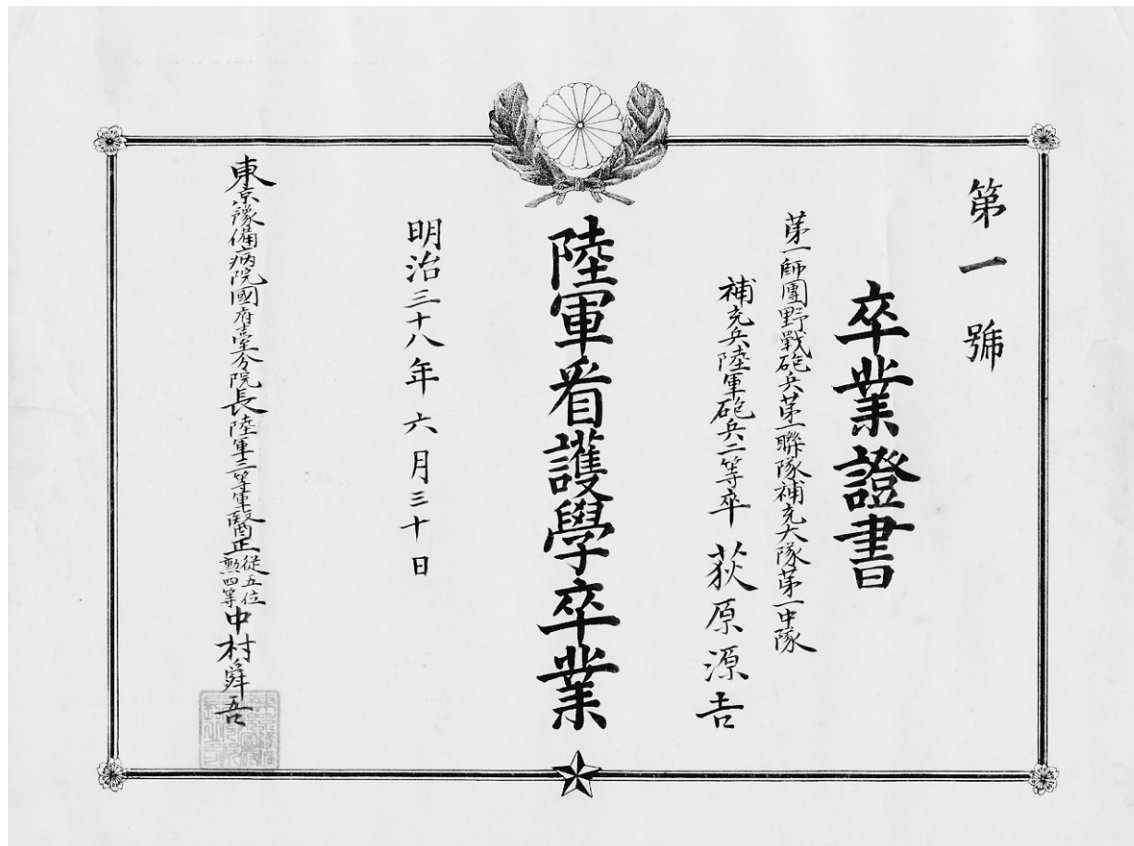


図2 陸軍看護学卒業証書

それは、前年の医師免許規則制定により、医学校は帝国大学医学部卒業の教授を2名受け入れることを義務付けられたが、財政的に困難だったことによる(佐久医師会誌編集委員会, 1995)。このように、当時は長野県内では医学教育を受ける場がなかった。

当時医師の資格を得るには、医学校を卒業すると無試験でも良かったが、学費は大変高額であった。医師になる方法として、医学校を卒業するほかに医術開業試験に合格する方法があった。医術開業試験は前期と後期からなり、前期は学科のみ、後期は臨床科と実地試験があった。源吉は医学校で学ぶことは経済的に困難であり、医術開業試験での合格を目指した。当時は医術開業試験のための予備校の学校や講習会があり、源吉は小学校に勤務する傍ら、夏季休業中に講習会に行ったらしく、講習証が複数残されている(図3)。

夏季講習の科目は、物理学、化学、解剖学、生理学の基礎科目であった。講習会の修了証が、日本医学校であったり、東京済生会医学

講習会であったりするのは理由がある。明治9年に、医師であり医学教育者でもあった長谷川泰により、医師養成のため済生学会が設立されたが、明治33年、突然廃校宣言をしたため、校長が学生たちの救済のため急きょ済生学会同窓医学講習会を開き、その後日本医学校を設立した。明治43年には私立東京医学校と合併している。源吉はそんな激動のときに東京の医学講習会に通ったのだった。これら講習会の修了証を見ると、科目と共に講師名とその学位、講師の印鑑が捺印してある。医学博士より医学士が多く、「ドクトル」というのは、欧米で医師免許を得た人のことである。そのような区別をしていることも、こだわりがあって面白い。また、源吉の氏名の前に「平民」とあり、身分制度の存在を実感する。

野沢小学校で教員をしていた40~43年に、医学講習会に行ったかどうかは講習会の修了証がない為不明だが、明治44年11月、29歳の時に長野で行われた医術開業前期試験に合



図3 医学講習会証書

格している。

後期試験は外科学、内科学、薬物学、眼科学、産科学、という臨床科目の他実地試験もあったため、前期試験のように本だけ勉強すれば合格できるようなものではなかった。

その頃中込で小林純庵という漢方医が開業していた。息子豊齊は蘭方医をしていたが、

31歳で没していた。そのため、跡継ぎは孫の2人の女子、斐子とはる乃であった。明治41年、純庵が死去した後、医院を継ぐ者はいなかった。大正元年、源吉は日本医学専門学校に入学している。荻原家には医学校で学べるほどの経済力はなかったため、源吉の将来を見込んで小林家で経済的援助をしたので



図4 日本医学専門学校第四学年生記念写真



図5 医術開業試験合格証

はないかと信氏は述べている。源吉は長男であつたので小林家に婿入りはできなかったが、斐子とは大正2年に結婚している。そして、日本医学専門学校に入学しつつも医学講習会を受け、大正4年、卒業を待たずに33歳で医術開業後期試験に合格をしている(図5)。初めて夏期講習会を受けてから実に9年が経っていた。佐久市志(1996)に明治29年から大正15年に佐久地域で開業していた医師の経歴をまとめた表があるが、医師数は28名、そのうち5名の経歴は他の地区から越してきたため記載がないが、源吉を除く他の22名は医学校や医学部を卒業している。佐久地域で医術開業試験により医師になった者は、非常に少なかったことが解る。

Ⅳ. 医師としての活動

医師となつてから間もなく、東京府の命で三宅島に赴任し開業している。両親と妻斐子、長女茂枝(2歳)を伴っていた。三宅島は東京から南南西に180km離れた火山島であり、20～60年毎に噴火し、最近でも2000年に噴火のため5年間の全島民避難があつた。現在でも三宅村国民健康保険直営中央診療所が島唯一の診療所で、医師3人のうち1人は東京都から派遣されている。

三宅島で4年間過ごした後、郷里の佐久に戻り、かつて斐子の祖父純庵が開業していた中込の家で開業した。源吉は38歳で、子供は5歳の茂枝を頭に、澄枝、清美の女子3人になっていた。家の間取りは図6のように道路に面して土間があり、「お店」と呼ばれる

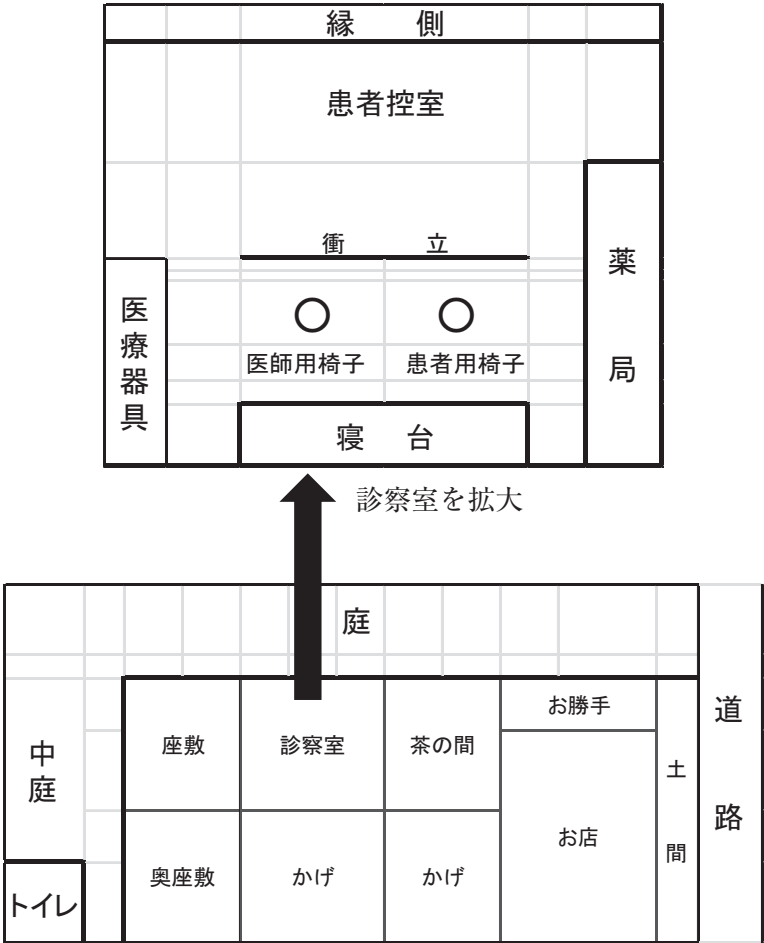


図6 萩原源吉の自宅の間取りと診察室

20 畳ほどの部屋があった。

順庵は幕末に江戸で天下の志士と国事を論じたり、書家でもあり、詩文にも長じ、漢学者の石川鴻齊とも親交が深く、詩集を出版するにあたり鴻齊から序文を得るほどのインテリであった。しかし、息子豊齊が31歳で病死すると、郷里の中込に帰り医業を営む傍ら、様々な塾を自宅で開いていたという。お店というのは何かを売っていた商店の名残なのかわからないが、順庵が塾を開いていたところかもしれない。「かげ」と呼ばれるところも畳敷きであったが、順庵が使用したのであろう薬箱の箆笥が一面におかれていたという。源吉の代では使用されなかったが、そのまま置かれていた。庭には、すずらん、桜草、ユキノシタ等が植えてあった。それらは利尿・強心、鎮咳・去痰、中耳炎・湿疹などに効能のある薬草として、順庵が植えたのではないかとされている。源吉は、純庵が使用した薬箆笥や植えた薬草を、廃棄せず大切に保管したものである。

患者は、道路から縁側伝いに中之間と呼ばれる待合に入った。すべて畳敷で患者の待合と診察場所とは衝立一枚で仕切れ、患者用と医師用の椅子、寝台、医療器具の棚があるだけだった。この診察室のことは、今も健在である源吉の3人の子息に聞いてもよくわからないと言われた。それは、診察室への立ち入りを厳しく禁じられていたからである。源吉は往診先の病家のことも、家の誰にも決して言わなかったという。図6の診察室の様子は斐子の妹はる乃の娘、並木良子氏の記憶による。並木氏は父親が転勤のため、幼少のころ源吉家に預けられたことがあり、叔父の行っている医師業が面白くこっそり診察室を覗いていた。薬局で斐子が薬を乳鉢で粉末にし、量を計っていた様子も見えていた。小皿に粉末の薬を山形に盛って天秤で測っていた。「薬を盛る」とは現代では「毒を盛る」のように悪事のために薬を与えるときに使用するが、薬

の量を測る天秤の小皿に山形に盛るところからきているのかもしれない。医療器具としてはピンセット、はさみ、メス、外科用器具があり、毎朝源吉がアルコールランプを付け、熱湯で消毒し、ガーゼは蒸気を通して消毒していた。聴診器を胸にあてて診察し、腹部を見るときは寝台(診察台)に横にして触診した。手術が必要な患者は、現在の長野市の病院に送らなければならなかった。傷の縫合は医院で行っており、つり針のようにカーブがついていたというので、縫合針は今と同じようなものかと思う。

V. 当時の看護職

源吉と看護職の関わりはというと、医院の近くに産婆がいて、異常分娩のときは走って呼びに来たというが、荻原医院に看護職は働いていなかった。都市部では明治17年の有志協立東京病院を皮切りに、同志社病院、櫻井女学校、日本赤十字社などで看護婦の養成が始まったが、長野県では明治28年に長野赤十字支部が、町立長野病院に看護婦の養成を委託したのが最も古い記録である。佐久地域では、明治29年に北佐久郡医師会が郡からの援助金で7人の速成看護婦の養成を行っている。その後も北安曇郡、下伊那、松本、上諏訪などで看護婦の養成が行われたが、源吉が開業を始めた大正5年頃は、看護婦になっても伝染病隔離病舎しか雇用の場がなく、同10年頃から病院や病家に依頼で派遣されることが増えたという(長野県看護協会50周年記念誌編集委員会, 1998)。

VI. 医(療)は仁術

源吉は、雨が降ろうと雪が降ろうと、病家に頼まれると断ることなく自転車で長い道のりを走った。決してタクシーは呼ばなかった。それは、タクシー代は病家の支払いになるか

らである。佐久の冬といえば、温暖化となった今でも氷点下10度以下となる。大正時代は氷点下20度になった日もあったという。

また、貧しい人からは、報酬を得ずに診ていたこともあったようである。昔、佐久地域には被差別部落があったが、そこは経済的に貧しい地区であり、診療代を出すのが困難な家もあったらしい。しかし、源吉は往診を頼まれると、何の差別もなく往診に行ったという。ある日の出来事は、幼かった並木氏の脳裏にはっきり焼き付いている。男が勝手に隅で土間に半日以上も頭をつけていて、どうしても源吉に合わせてくれと頼んでいた。源吉は、患者を診ていてなかなか来ることができず、ようやく来ると、その男は「これでお願ひしやす。」とわずかな細いネギをさしだしたという。診療代が払えず、おそらくその細ネギが男の出せる精一杯の感謝の気持ちであったのだろう。そして男の貧しさは、往診に行き、家の様子を見てきた源吉が誰よりも良く解っていたに違いない。「いいよ。」と言だけ言い、後は何も言わなかったところに源吉の優しさ、思いやりが感じられるエピソードである。

貧困者への医療支援が様々な形で行われた時代であった。全国的には明治44年に明治天皇より賜った150万円を基金に、恩賜財団済生会が県に事業を委託し、県から各地の医療機関に医療を委託する事業が始まった。医療支援を希望する者は治療券の交付を受け、それを医師に渡して無料で診療してもらい、診療費は後日済生会から医師に支払われる仕組みであった。他にも、日本赤十字社は、貧困者の治療や無医地区への巡回診療を行うという社会事業を行った（佐久市志編集委員会, 1996）。

南佐久郡医師会では、日露戦争出征軍人の家族の無料診療を実施、大正元年には貧民施薬救療券1千枚を発行したという記録がある（佐久医師会誌編集委員会, 1995）。

特にこの佐久地域は、貧しい山国で無医村が複数あった。佐久市志によれば、そのような村は「医療機関に遠く、長引く不況のため生活状態は苦境に陥り、体調をくずしても無理を重ね、一層病状を悪化させるものが多かった」とある。昭和5年ごろからの昭和恐慌期には、皇室から賜った100万円に、国からの補助金を加え、恩賜医療救護事業として全国で巡回診療や出張診療が行われた。佐久地域周辺では内山村、三井村、志賀村で出張診療所が設置された。内山村での記録が詳しく残っており、年間を通して週に1日ずつ無料の診療が行われ19年まで続いた。担当した医師名も記録に残っている。昭和7～13年は不明だが、14、18、19年は源吉が毎週月曜日に担当し、受診者が多い年は600人を越えた（佐久市志編集委員会, 1996）。

貧困者に医療を施し救済したのは、医師ばかりではなかった。長野県看護協会50周年記念誌(1998)に下伊那産婆会の活動が詳しく掲載されており「貧困者ハ施療ス」とある。また、大正15年に、貧困者に対して産婆会が無料診察券を村長に委託して交付したこと、昭和7年の日支事変への出征家族に無料で助産し、産婆会から1円まで補助を出したことが記録されている。当時の助産料は産後1週間の処置を含んだ料金で、大正9年の料金は10円以上とあるので、制度に支えられたものというより、産婆のボランティアだったことが解る（長野県看護協会50周年記念誌編集委員会, 1998）。

このように、皇室と国の補助のもと、町村の行政と各種社会事業の団体が貧困者への医療救済制度を作ったが、医師会、産婆会等医療職能団体も貧困者が医療を受けられるような配慮をしていた。そして、それは時として個々の医療人の使命感と博愛の心に支えられたものであったことが伺える。

VII. その後の源吉

菩提寺である龍雲寺を大変大切に、家1軒が建つほどの寄付をしたという。また、野球が好きで、暇ができると近くの中込小学校に子供たちがしている野球を見に行き、ついにはバックネットを寄贈したほどであった。医院に急患が来ると、斐子が小学校の職員室に電話し、戻ってきてもらったという逸話がある。野球の社会人チームを作り長野県の大会で優勝した時は、どこから調達したのかオープンカーを借りて、優勝パレードを行い喜んだ。今でも信氏のもとには源吉が書いた早慶戦のスコアブックが大切に残されている。町議会議員、医師会理事となり(小林, 1929)郷里の発展につくした。3男5女の子供に恵まれ、3人の息子たちは、教員、議員秘書、医師と奇しくも源吉がたどった同様の職業に就いた。昭和27年2月2日、享年71歳、脳卒中で死去する。

VIII. 終わりに

明治・大正・昭和の激動の時代に生きた萩原源吉は、日露戦争で看護卒となり医師を志し、郷里で小学校の教員をしながら東京で医学講習を受け、9年間の苦学の末、医術開業試験に合格した努力の人であった。医師になってからは、東京府の要請で三宅島に赴任、郷里に戻ってからは無医村への出張診療をはじめ、地区による差別無く診療し、貧しい人々にも手厚く対応にあたった、まさに「医は仁術」を体現した生涯であった。それは、当時医療職として働く多くの者が、共通に持っていた心であったと考える。

謝辞

本稿を執筆するきっかけを与えてくださった「幼い少女の見た昔のお医者さん」の著者

並木良子氏、多数の資料をご提供くださいました萩原信氏、萩原秀男氏、箕輪啓子氏に深く感謝します。

文献

- 第二次世界大戦資料館>人名事典>渡辺錠太郎(2004), 2014/9/20 <http://royallibrary.sakura.ne.jp/ww2/biblo/japan/wa/watanabe.html>
- 50周年記念誌編集委員会(1998): 看護のあゆみ—50周年記念誌. 松本: 長野県看護協会.
- 小林牧太(編)(1929)佐久人国記. 佐久: 佐久人国記刊行会.
- 小林又七(1890)陸軍看護学就業兵教科書. 国立国会図書館 近代デジタルライブラリー, <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/901761>, 2014/9/20
- 長野県佐久市立岩村田小学校百周年記念事業実行委員会(1978). 岩村田教育百年. 佐久陸軍省(出版年不明)陸軍看護卒教科書第4版, 国立国会図書館 近代デジタルライブラリー, 2014/9/20, <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/901762/13>,
- 佐久市立野沢小学校創立九十周年沿革誌編集委員会(1965). 創立90周年沿革誌. 佐久
- 佐久市志編集委員会(1996)佐久市志 歴史編(四) 近代. 佐久: 佐久市志刊行会.
- 佐久医師会誌編集委員会(1995)佐久医師会誌 医療の譜—仁術実践の記録. 佐久: 佐久医師会
- 鈴木紀子(2010)陸軍における看護卒教育の始まり(明治6年～明治17年). 日本看護歴史学会誌, 23, 92-106.
- 鈴木紀子(2013)陸軍看護学教科書—明治5年から明治23年まで—. 日本看護歴史学会
- 武石典史(2005)明治前期東京における中等教育の趨勢—伝統学知から近代知へ—. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 45, 87-96.
- 東京高等学校, 2015/1/28, <http://www.tokyo-hs.ac.jp/ayumi.html>

表1 萩原源吉 年表

| 年号 | 西暦 | 年齢 | 主な出来事 |
|----------|------|----|---|
| 明治 15 | 1882 | 0 | 岩村田に生まれる |
| 32 | 1899 | 17 | 東京中学校卒業、小学校で教職に就く 小林斐子の父 豊斉死去(31 歳) |
| 34 | 1901 | 19 | 1 月から岩村田小学校勤務 |
| 37 | 1904 | 22 | 日露戦争勃発 |
| 38. 6. | 1905 | 23 | 陸軍看護学卒業 補充兵陸軍砲兵二等卒 |
| 39. 5. | 1906 | 24 | 陸軍看護手 37・8 年の日露戦争従軍記章授与 |
| 39. 8. | | | 私立東京医学校にて夏期講習修了(7/30~8/25) |
| 39. 9. | | | 日本医学校第 3 回夏期講習第一学科修了 |
| 40 | 1907 | 25 | 明治 40-43 年野沢小学校勤務 |
| 41 | 1908 | 26 | 斐子の祖父 純庵死去(80 歳) |
| 44 | 1911 | 29 | 日本医学校第 8 回夏期講習会第一学科修了 医術開業前期試験合格 |
| 大正元年 | 1912 | 30 | 日本医学専門学校入学 日本医学校第 9 回夏期講習会第二学科修了 |
| 2 | 1913 | 31 | 小林斐子と結婚 |
| 3 | 1914 | 32 | 東京済生医学講習会卒業(実地臨床科を修了し卒業試験に合格) 医術開業後期学説試験に合格 第 1 次世界大戦勃発 |
| 4 | 1915 | 33 | 医術開業後期試験合格 日本医学専門学校を中途退学 |
| 5 | 1916 | 34 | 東京府の命で三宅島伊ヶ谷村に赴任、開業 |
| 7 | 1918 | 36 | 第 1 次世界大戦終了 |
| 9 | 1920 | 38 | (現在の長野県佐久市)中込に開業 |
| 12 | 1923 | 41 | 母 たね死去(71 歳) 関東大震災 |
| 14 | 1925 | 43 | 中込町会議員 父 庄治死去(80 歳) |
| 昭和 14-19 | | | 内山村出張診療所で週に 1 回診療 |
| 27 | 1952 | 71 | 脳卒中で死去 |